

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	3370105391		
法人名	有限会社 オフィスフジワラ		
事業所名	グループホームあうん		
所在地	岡山県岡山市東区松新町82-6		
自己評価作成日	令和6年1月20日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	特定非営利法人 津高生活支援センター		
所在地	岡山市北区松尾209-1		
訪問調査日	令和 6年 2月 15日		

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

事業所として、次の理念を大切にしている。◎利用者一人ひとりが、居心地よく自分らしくしていただける生活の支援を行う。◎家族の方とは、日頃から意思の疎通を心がけ、安心と満足を感じていただく。◎家族の方には、共通の目的を持った理解者となっていただく。誇れる点として、職員の定着率の良さを挙げたい。開設21年目を迎えるが、勤務歴10年を超える職員は全職員の3割を占め、勤務歴7年以上の職員は5割以上を占める。ベテラン職員も勤務年数がまだ浅い職員も、それぞれに自分の持ち力を発揮しながら、困難な出来事にぶつかることがあっても、乗り越えていくことが出来ていることに頼もしさを感じている。また、ホームの周りには畑があり、季節の野菜を作ったり、実のなる木(さくらんぼ、ゆすら、びわ、いちじく、柿)を植えて、季節ごとの楽しみにしている。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

管理者をはじめ職員は、日頃からホームの理念に基づいたケアに努め、その人らしさを大切に生活を送れるようにしています。入居者1人ひとりを知るために対話したり、家族と会話する中で情報共有することで、思いの把握やその人らしさを叶えるケアに繋がっている様子が窺えます。家族とは常に入居者のことで相談したり情報共有するようにし、介護計画書は原案ができた時点で家族に直筆で意向を書いてもらう事も、職員と家族全員で協力しあって入居者を支える関係作りができています。往診はほぼ毎日あり、24時間体制で(看護師と連絡も繋がるので看取りや何かあった時にすぐに)医療面の相談できる環境があり、入居者や家族、職員の安心感に繋がっています。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	利用者一人ひとりが自分らしい生活を送れる支援を行うこと。家族の方との意思疎通を大事にし、共通の目的を持った理解者になって頂くことを理念に掲げている。日頃から目に入るよう掲示もし、理念は共有出来ていると思う。	理念は玄関と介護記録の表紙に掲示し、振り返りとしてミーティングでも確認するようにしています。理念に基づいたケアを行い、日頃からその人らしさを叶えた生活が送れるように支援している様子が窺えます。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍以降、地域住民のボランティアや小中学生との交流は中止しているが、利用者にとって必要な整髪などは地域の美容院の方の来訪を継続している。事業所自体は、地域に溶け込み日常的に交流している。	地域住民でもある代表と管理者は以前から民生児童委員などを担って来たことで、ホームは地域との繋がりが根強くあります。コロナの情勢を見ながら今後ボランティアや、小中学生との交流が再開できるよう検討しています。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍以降、小中学生に認知症の理解を広げる機会は中断しているが、地域に住む方々から、認知症や介護に関する相談を受けることは多い。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍以降、事業所の中での開催ではなく、事業所外の別室で二カ月毎に開催した。メンバーの広がりはないが、サービスの実際を報告し、率直な意見交換が出来ている。今年度9月から事業所内で開催している。	管理者はコロナ禍でも関係が薄くならないように、感染対策をとりながら2ヶ月に1回運営推進会議を開催しています。会議には民生委員や地域包括支援センターの実習生が参加することもあり、学びの場としての役割も見受けられます。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域包括支援センター担当者には、運営推進会議への参加を通して事業所の実情を知ってもらったり、地域の情報などを交換している。岡山市の担当者へは、質問や相談を気軽に出来ている。	民生委員が他の事業所から知り得た情報を(運営での対応や感染症のことなど)共有し、ホームでのサービス向上に活かしています。加算についてや分からないことがあれば市の担当者に連絡し聞くようにしています。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	「身体的拘束等適正化のための指針」の中に「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を挙げ、読み合わせをした。安全のため玄関の施錠は行っているが、利用者の行動の自由を妨げないケアに取り組んでいる。	帰宅願望が見られた場合、入居者の行動を阻止しない事を基本としており、付き添いや見守り、気分転換に繋がるケアを心掛けています。状況に応じて家族に相談し、協力を得ながら本人が安心して過ごせる様に対応している様子も窺えます。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	「高齢者虐待防止のための指針」を整え、職員研修の機会も持っている。「虐待の芽チェックリスト」など活用しながら、折に触れて、虐待の芽や不適切ケアの自己チェックを行い、防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	数名の利用者が成年後見制度を活用している。個々に応じて支援している。権利擁護についての研修の機会も持っているが、職員個々で理解の差はある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は丁寧な説明を心がけ、理解・納得をしていただいている。また、契約の前には、重要事項説明書にて施設やサービスの内容など詳細な説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者からは日々の関わりの中で、家族からは来所時や個別の連絡の時に気軽に話していただけるよう努めている。また、地域運営推進会議が外部者に表す機会となっている。	日頃の関わりで知り得た意見は家族と相談し、協力を得ながら反映出来るように配慮しています。家族とは面会や電話等で会話をすることで気になることや、意見があれば気軽に話せるように声を掛けています。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月、ユニットごとにミーティングを持ち、意見交換を行っている。個別でも随時、意見や要望を聴く機会を持ち、聴いた意見や提案は代表者に報告し反映できるよう努めている。	管理者はミーティング前に職員から聞いている意見や要望を会議の場で回り、サービス向上に活かしています。意見によっては管理者から代表に伝え意見の反映にも努めています。管理者は職員が働きやすい環境づくりを目指し、日頃から話している様子が窺えます。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個々の能力や勤務状況に応じた給与水準の整備に努めている。また、職員各自の勤務希望(休み希望や有休使用など)を最大限尊重している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者に多くを任せているが、資格取得への挑戦や研修などに参加することへの援助は惜しまない。事業所内研修は年間計画を立てて実施している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者が行っている。同区内の同業者とのネットワークづくりに取り組んだことがあり、交流は継続している。得た情報をサービスの質の向上に活かすこともある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前の面接や聞き取り、家族・関係機関からの情報提供によりサービス利用に至った状況・状態を把握し、入居後はチームで日々情報共有しながら、安心して生活していただけるよう関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	最初の相談時より、家族の方の困っていることや不安、要望を丁寧に伺うよう努めている。その後、入居に至るまでも、来訪時や電話連絡時に会話を重ねながら関係づくりを図り、安心して利用して頂けるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	見学や入所相談の中で、家族が今困っていることや不安、悩みに耳を傾けながら、必要であろう情報を提供したり、他のサービス利用を紹介するなど支援に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自分で出来ることは、できるだけ本人にしてもらうことを大切にしている。日々の生活の中で、職員と一緒に家事や作業をしながら共に過ごす場面では、「ありがとう」や「助かりました」の言葉を大切にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	理念にも掲げているように、事業所にとって大切にしていることである。職員も、大切なこととしての自覚があり、家族とのコミュニケーションや関係づくりに努めている者がほとんどである。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの人や場所との関係継続の支援には努めている。親族の方の協力を得て定期的に美容院に行ったり、古い友人との手紙のやり取りなどの支援が出来ている。	職員は入居した際に本人や家族から聞いた情報をメモに残して収集し、本人を知るようにしています。家族とは協力を得ながら面会や外出によって関係が途切れないように支援している様子が窺えます。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者個々の性格や互いの関係性を把握し、時には職員が介入しながら、利用者同士の関わり合いが持てるよう努めている。利用者同士、支え合っている関係も存在している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後も、本人や家族と築いた関係を大切にしている。退所された方の家族から新たな相談を伺う事例や、退所された方のご家族の方が新たに入所されるという事例がある。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の生活の会話の中で、希望や意向を聞き取ったり、表情などから察知したりしている。自ら表出できない方については、これまでの生活や本人の立場を考えてくみ取るようにしている。	日々の関わりの中で入居者の言動から思いを汲み取るようにしています。意思表示が難しい入居者は入居当初から知り得た情報を元に寂しくないように声を掛けたりするなど、本人の立場になって支援している様子が窺えます。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所以前の生活歴や暮らし方は、本人・家族・担当ケアマネから情報収集してフェイスシートに記載している。これまでのサービス利用の経過などは担当ケアマネから情報収集することが多い。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	介護記録に残し、毎日の申し送りで一人ひとりの状態を引き継ぎながら現状把握に努めている。毎月持つミーティングも把握する機会である。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画の作成時には、本人・家族から生活全体・介護サービスへの要望や意向を聞いている。また、日常生活の中で関わっているケアスタッフとの話し合いで上がってきた課題を踏まえての介護計画づくりに努めている。	介護計画書の家族の意向欄は、なるべく直筆で記入してもらう様に取り組んでおり、意見や要望をケアに反映させる工夫が見受けられます。計画作成では「その人らしい暮らし」を基軸に、職員間でケアの内容を検討しています。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の介護記録には日々の様子やケアの状態が具体的に記録されている。情報共有するための引継ぎ書や連絡ノートがあり、申し送りやミーティング、カンファ時の情報共有も実践や介護計画の見直しに役立っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時々にも生まれる状況やニーズに対しては、チームで話し合い検討したり、家族や親族などの協力者とも相談するなどして柔軟に対応するように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	花が好きな方のための花壇や花畑づくりに使う花の苗や干し柿づくりの材料となる柿の提供など、楽しみや能力を発揮する場面への地域の方々からの支援がある。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時、かかりつけ医の希望を伺うが、現在は全員が同じかかりつけ医(主治医)の往診を受けている。変調時には、主治医に報告・連絡を行い指示を受けたり、必要時には受診同行したり臨時の往診を受けることもある。	コープ西大寺診療所からほぼ毎日往診があります。入居者の気になる事などすぐに医師に相談できる医療との連携体制が、入居者や家族の安心に繋がっている様子が窺えます。受診時には職員が日常のことを伝え、家族も協力を得て同行することで一緒に先生の話聞くこともあります。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の訪問看護を利用。訪問時には情報提供書を用意し、その時々相談をしたり、介護職では出来ない医療処置を依頼することもある。かかりつけ医療機関の看護職とも密に連絡・相談を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には同行し情報提供を行い、家族とともに医師からの説明を受け、早期の退院に向けて支援してきたが、コロナ禍の中では、家族は勿論、ホーム職員も面会出来ず、これまでのような細やかな情報入手が難しくなっていた。今後は以前のような関係づくりに努めていきたい。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時、「重度化した場合における対応および看取りに関する指針」をもとに事業所の方針や支援内容を説明している。実際に看取りの支援が始まる際には、主治医との連携を十分に説明を行い、その後も本人・家族の希望や意向を確認しながらの支援に取り組んでいる。	本人や家族の意向を基に看取りをしています。意向はその都度話し合い本人にあったケアに努めています。看取り後はカンファレンスを開催し振り返りを行うことでより良い看取り対応に繋がっています。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	今年度は、利用者が急に顔面蒼白になりぐったりする急変があった。その折、初期対応についての知識を情報共有した例がある。実践力に不安を持つ職員がいるので、急変や事故発生時に備えての応急手当や初期対応の訓練の必要性を感じている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	水害(洪水)については、6月に図上訓練を行った。火災訓練については、1月実施の予定である。避難にあたっては、近隣住民の協力も依頼している。	避難訓練は夜間想定で実施し、職員から災害に対する意見を聞き避難方法等話し合いをしています。消防点検が終わった後、管理者は職員とホームの消防設備に関しておさらいをして忘れないように配慮しています。民生委員と避難訓練を行っていたこともありましたが、コロナのため中断しています。	誘導や避難方法等、災害を想定した訓練を継続する事で、落ち着いた避難対応に繋がることに期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日頃の言葉のかけ方や自尊心への配慮について気をつけて対応している職員は多いが、声の大きさや語尾の強さが気になることがある。自らの対応について振り返る機会が必要と考える。	職員は声掛け等ケアの中で気になる事を管理者に伝え、ミーティングで話し合っています。管理者は日頃の中でも職員同士気になる事など話ができるように声掛けています。	日頃のケアに対する振り返りを行うことで、ケアの質の向上に繋がることに期待します。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の方とのコミュニケーションを大切にし、その中で少しでも自分の思いを表せられる関係づくりを心がけている職員がいる。自己決定が出来るよう、些細なことでも尋ねて、待つ姿勢を心掛けている職員もいる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その人らしい暮らしの実現に向け、一人ひとりの体調や状況、ペースに合わせて柔軟に対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問髪カットを導入し、自分で希望を言える方は好みの髪型にしてもらっている。女性利用者には、誕生日や行事の折、化粧をしたりなど、おしゃれを楽しむ支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	介護職兼栄養士が希望や季節感を大切に食事が楽しみになる献立づくりに努めている。誕生日には、本人から聞き取った「食べたいもの」を用意している。また、利用者と職員と一緒に同じ食事を摂り、準備や片付けも利用者の出来ることを一緒に行っている。	食事はホームで手作りしており、食事形態や食べたいものに柔軟に対応しています。また、季節感を献立に反映させた食事を提供しています。入居者は一緒に材料の下準備や食器洗いなど日々役割を持っている様子が窺えます。食事前には歌を歌い口腔機能の維持を図っています。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分摂取量を記録し、確保の確認と意識づけを行っている。個々の嗜好や嚥下状態に合わせての献立づくりや形状の工夫、量の調節を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアは起床時と毎食時後に行っている。また、必要に応じて、訪問歯科診療や歯科衛生士による訪問口腔ケアを受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレでの排泄、できる限りの布パンツ使用を基本としている。個々の排泄のサインや排泄パターンを見てのトイレ誘導を行い、本人の負担のない支援を心掛けている。	入居者1人ひとりの様子を日々観察し、排泄表も活用しながら本人のペースに合わせた支援を促している様子が窺えます。入居者に合わせて紙パンツから布パンツに変更したり、職員は本人の立場になってケアの方法を検討しています。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	スムーズな排便は日々の課題である。個々の排便状態を把握し、便秘予防のための水分摂取や乳製品の摂取に取り組み、温罌法や入浴、マッサージ等でも便秘解消に努めている。便秘薬でコントロールすることが多い。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	往診の時間や行事の都合で入浴の曜日や時間帯を職員が決めることは多いが、無理強いせず、本人の希望を尊重しながらの支援を心掛けている。本人の希望で、ほぼ毎日入浴される方もいる。	年齢や疾病を考慮した入浴目安がありますが、本人の気持ちを優先した入浴支援をしています。基本午後からの入浴ですが、希望によって毎日入浴することもできます。入浴しない日はホットタオルで清拭を実施することで、気持ち良さと整容に努めています。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その時々体調や状態に応じて、また、本人のペースに合わせての休息の支援は出ている。安眠できるよう居室内を整えたり、湯たんぽや温かい飲み物の提供などの支援も行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の薬情報はファイルし、いつでも確認できるようにしている。服薬の変更があった際には介護記録や連絡ノートに記し情報共有し、その後の様子観察を行うようにしている、かかりつけ薬局とも情報共有をし、何かあれば報告や相談を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	出来る方には洗濯物たたみや食器洗い、食事の簡単な下ごしらえなど手伝っていただき、感謝の気持ちを伝えている。また、気分転換が必要な時には、ゲームをしたり歌を歌うなど楽しい時間の提供に努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ご家族や親族の方の協力のもと、本人の希望にそっての買い物や美容院に行くなどの支援が出来ている。また、ご家族の方からの誘いで、一緒に散歩をしたり、外食に出かけたり、遠方へドライブに行ったりなどの機会もある。	家族や入居者の意向に添った外出や外食に出かけています。職員と一緒に梅や桜、コスモス畑など季節を感じられるドライブに行っています。外出に行かない時でも敷地内を散歩したり畑でできた野菜を収穫したりしながら気分転換を図っています。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の管理が出来なくなってしまった方がほとんどであるが、お金を所持している利用者は2名いる。お金を所持することについて、ご家族と一緒に検討し、所持することの意味を確認したうえで支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の携帯電話から自ら電話をしている方がいる。家族や親戚の方からの電話を本人に取り次ぐことが多い。また、家族や友人、知人にハガキで便りを書き、投函する支援を行っている事例がある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	それぞれのユニットごとに工夫して居心地のよい空間づくりが出来ている。季節の草花を活けたり、季節ごとにホールの壁の飾りつけを変えたりなど季節を感じる事ができる工夫ができています。	1階と2階のフロア職員が季節感のある飾り付けやイベントの写真を掲示して明るい雰囲気が見受けられます。食事の準備が気になりそわそわする入居者には、手作りの仕切りで落ち着ける雰囲気を提供しています。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファやテーブルの配置を工夫して、共用空間の中での一人ひとりの居場所づくりを行っている。気の合う方同士が過ごせる空間づくりや、反対にトラブル回避のための空間づくりの工夫も行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時に使い慣れたものや馴染みのあるもの(家具や布団など)を持ち込んで頂くようにしている。一方、利用者によっては、物が無い方が落ち着いて過ごすことができる方もいるため、本人の様子や状態を見ながら配慮している。	リクライニング車椅子を使用する入居者には車椅子が使用しやすい居室に移床したり、本人のこだわりの物や馴染みの物で居心地良く過ごせる居室づくりに配慮しています。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の表札やトイレの目印など、分かる工夫をしている。一人ひとりの移動力や行動を考慮して、安全で分かりやすい環境づくりに努めている。		